

平成艸紙



おりおりの記

ソ連の「壁」の思い出

中央大学 法科大学院 教授
東京財団 上席研究員

森信 茂樹

私の役人生活33年半の中で、最もユニークな経験をしたのは、旧ソ連大使館に一等書記官として勤務した1981年から83年までの2年間であった。ソ連がアフガニスタンに侵攻した直後で、日本政府は「政府職員との公式な接触を禁じる」という制裁を課しており、「仕事はするな」という時期であった。

着任早々、前任者からアパートを引き継いだ際、彼から「入り口横の『壁』には、いろいろお世話になるので、挨拶をしておいた方がいい」といわれた。赴任前ソ連大使館勤務の実態については外務省からレクを受けていたが、「壁」にお世話になる、挨拶をするということは聞いていなかった。その理由を聞くと、「今にわかる。今日着任したことだけでも言うておいた方がいい」ということだったので、「壁」に向かって本日着任したことを述べておいた。

その後、子どもの幼稚園への苦情、自動車事故の処理など、ぶつぶつ「壁」につぶやいて、いろいろお世話になるのだが、最も印象深いのは、日本から若手経済人の一行がモスクワを訪問した際の出来事だ。

当時経済班に属していた私が案内役として一行に2日間同行したのだが、到着一日目のモスクワホテルでの内輪のディナーに、キャビアが出な

った。ソ連といえばキャビアで、日本からきた経済人としては、当然それを期待したのであろう。ディナーが終わった後私に、「キャビアが出なかった」と苦情が寄せられた。さっそく帰宅し、「壁」に向かって、「本日日本から要人が来てモスクワホテルに泊まっているのだが、夕食にキャビアが出なかったと苦情があった」とつぶやいた。

翌日の朝、ホテルに行くと、一行から、「朝食に食べきれないほど大量のキャビアが出た！日本人は朝からキャビアは食べられない。みんなもつたいないといっている」と、苦笑いしていた。

旧ソ連の盗聴システムは、きちんと機能しているのだが、関係部署への連絡は機械的で、朝食に大量のキャビアを提供する羽目になったのだろう。

「ベルリンの壁」「バカの壁」など、「壁」には評判が悪いものが多いが、ソ連の「壁」は、どこか人間的で懐かしい。

